

## 中間評価結果（公表様式）

38

大学名	北海道大学
研究施設名	遺伝子病制御研究所
拠点の名称	細菌やウイルスの持続性感染により発生する感染癌の先端的 研究拠点
認定期間	平成28年4月1日～平成34年3月31日

### 1. 拠点の目的・概要

#### 【目的・意義・必要性】

感染癌を中心とし、関連する微生物感染、それに対する宿主応答としての免疫・炎症という局面から発生機構の解明をさらに進め、新たな治療や予防に結びつく基礎研究の推進を目指す。関連学術コミュニティの研究者との共同利用・共同研究を推進する拠点を形成し、公的研究機関として研究基盤の整備・充実を図ることは、感染症や癌の制圧を目指した研究を効果的に推進するために必要である。

#### 【取組内容・期待される効果】

感染癌研究のみならず、関連する免疫や炎症の研究領域と連携して全国的なネットワークの構築をさらに拡大し、研究成果や研究情報を共有することで、感染癌をはじめ、周辺の学術コミュニティの相乗的な発展、さらには新しい融合研究の進展が期待される。

### 2. 総合評価

#### （評価区分）

B：拠点としての活動は行われているものの拠点の規模等と比較して低調であり、作業部会からの助言や関連コミュニティからの意見等を踏まえた適切な取組が必要と判断される。

#### （評価コメント）

感染癌研究の研究領域を代表する卓越した研究者が在籍し、分子ライブラリ等を共同利用に供しており、国際共同研究の推進等を通じて共同利用・共同研究拠点としての機能を果たしている。

今後、拠点としての研究展開の方向性について更なる検討を行うことが望まれる。

### 3. 観点毎の評価

①拠点としての適格性
(評価コメント) 感染癌の研究領域を代表する卓越した研究者が在籍しており、免疫・がん、特に感染癌の研究領域で優れた業績を上げている。外部資金の採択も着実に実績を上げているが、事務支援を含め運営体制の整備が望まれる。
②拠点としての活動状況
(評価コメント) 国際シンポジウムの開催に積極的であり、研究所の規模に比較して高い活動を示している。siRNA ライブラリ、低分子ライブラリなどの提供が行われているが、情報提供は十分とまでは判断できない。
③拠点における研究活動の成果
(評価コメント) インパクトファクターの高い学術誌に論文を発表しているが、論文数は多いとは言えない。
④関連研究分野及び関連研究者コミュニティの発展への貢献
(評価コメント) 関連研究者コミュニティの意見を受け入れる運営体制がとられている。
⑤審査(期末)評価結果のフォローアップ状況
(評価コメント) 国際共同研究を増やすなどの努力が認められる。今後の人的交流は発展が期待される。
【以下、該当する拠点のみ】
⑥期末評価結果のフォローアップとして、各国立大学の強み・特色としての機能強化への貢献
(評価コメント) 国際化への努力はなされているが、今後、国際グラントへの積極的な応募なども必要であると考えられる。
⑦拠点としての今後の方向性
(評価コメント) 研究のターゲットを感染癌へ特化することなく、むしろエピジェネティクス等を含めた研究領域に広げて行く方針であるように見受けられるが、今後、拠点としての研究展開の方向性について更なる検討を行うことが望まれる。

## 中間評価結果（公表様式）

39

大学名	北海道大学
研究施設名	人獣共通感染症リサーチセンター
拠点の名称	人獣共通感染症研究拠点
認定期間	平成28年4月1日～平成34年3月31日

### 1. 拠点の目的・概要

#### 【目的・意義・必要性】

人獣共通感染症の克服に向け、病原体の生態、病原性、ゲノム解析等の基盤的研究を国内外の研究者コミュニティと共同で実施する。さらに、本拠点を基軸として、喫緊の課題である感染症研究の次世代を担う国内外の人材育成と国内外における感染症発生に対応できる体制の組織化を推進する。

#### 【取組内容・期待される効果】

国内最大規模のBSL-3動物実験・研究施設、最先端のゲノム・情報解析システム等を共同利用に供し、人獣共通感染症の診断・予防・治療に関する基礎・応用研究を推進する。また、人獣共通感染症の国際研究拠点として、国内3大学（東京大学、大阪大学、長崎大学）の感染症研究拠点と連携し、国際社会における感染症対策と人材育成に貢献する。

### 2. 総合評価

#### （評価区分）

A：拠点としての活動は概ね順調に行われており、関連コミュニティへの貢献もあり、今後も、共同利用・共同研究拠点を通じた成果や効果が期待される。

#### （評価コメント）

人獣共通感染症研究に関して、世界的なネットワークを構築して、共同利用・共同研究拠点としての機能を果たしている。また、国際感染症に関する教育に注力していることは高く評価される。

今後、国際的な連携の更なる強化、国際共同研究の推進とともに、常勤スタッフの増強や知的財産権の活用が望まれる。また、国際感染症の研究分野として、地域や疾患等の重点化に関する戦略的な検討を行うことが期待される。

### 3. 観点毎の評価

①拠点としての適格性
(評価コメント) 人獣共通感染症の克服という拠点の目標が明確であり、多くの論文を発表し成果を上げているが、専任の教員は減少している。
②拠点としての活動状況
(評価コメント) 外国人研究者及び若手研究者の参加が多く、国公私立大学のほか、民間機関や外国機関等からの参加が多い。施設・設備等の利用は、学内利用が大半となっている。
③拠点における研究活動の成果
(評価コメント) インパクトファクターの高い学術誌に論文を発表するとともに、拠点における研究成果がプロジェクトに発展している。特許出願等についても今後の尽力が期待される。
④関連研究分野及び関連研究者コミュニティの発展への貢献
(評価コメント) 共同利用・共同研究を通じて、医学、獣医学等の関連研究者コミュニティの発展に貢献している。
⑤審査(期末)評価結果のフォローアップ状況
(評価コメント) 拠点の財務状況の改善に取り組み、研究費の獲得率が増加している。知的財産権、特に特許を活用した収入確保に向けた検討を行うことが期待される。
【以下、該当する拠点のみ】
⑥期末評価結果のフォローアップとして、各国立大学の強み・特色としての機能強化への貢献
(評価コメント) 海外の研究機関とのクロスアポイントメントの設定や企業と連携したイノベーション創出に積極的に取り組んでいる。また、大学院に「国際感染症学院」を設置したことは評価される。
⑦拠点としての今後の方向性
(評価コメント) 知的財産権の活用とそれによる研究者への経済的還元について、積極的な取組が期待される。

## 中間評価結果（公表様式）

### 40

大学名	東北大学
研究施設名	加齢医学研究所
拠点の名称	加齢医学研究拠点
認定期間	平成28年4月1日～平成34年3月31日

#### 1. 拠点の目的・概要

##### 【目的・意義・必要性】

本拠点では、生命の誕生から発達、成熟、老化、死に至る加齢の基本的メカニズムを解明し、得られた研究成果を応用して加齢に伴う認知症などの脳・神経疾患や難治がんなどの加齢疾患の克服を目指す。さらに、先端的予防・診断・治療法や革新的医療機器の開発を行い、超高齢社会における健康長寿の実現に向けて、加齢医学の中核的研究センターとして先導的な国内外の共同研究を展開する。

##### 【取組内容・期待される効果】

モデル動物を用いた加齢研究領域、加齢・発生分化・生体防御の基礎的研究領域、腫瘍制御研究領域、脳の発達・加齢研究領域、革新的医療機器開発の、五本柱の共同利用・共同研究を推進する。グローバル化、人材養成機能の強化、新分野創成、異分野融合研究の観点から、一層の機能強化を行う。これにより、スマートエイジング社会の実現に貢献し、世界に新しい高齢社会のあり方を提示する。

#### 2. 総合評価

##### （評価区分）

A：拠点としての活動は概ね順調に行われており、関連コミュニティへの貢献もあり、今後も、共同利用・共同研究拠点を通じた成果や効果が期待される。

##### （評価コメント）

脳研究、医用工学分野における卓越した研究者が在籍し、地域住民の理解を得た遺伝子バンクの整備等を通じて、高水準の研究、企業との連携等に取り組んでいる。また、海外の研究機関との連携も活発であり、国際標準の非臨床試験環境の整備など、拠点としての機能を強化している。

今後、共同利用・共同研究に参加する研究者の利便性を向上するための継続的な運営面での改善や、実用化に向けた医用工学分野の研究の進展が期待される。

### 3. 観点毎の評価

①拠点としての適格性
卓越した研究者が在籍し、充実した研究施設の下で、遺伝子研究のためのデータ蓄積等を進めている。
②拠点としての活動状況
多様な研究人材に対する公募・招へいを進めるための運営面の更なる工夫改善が望まれる。
③拠点における研究活動の成果
脳科学や認知症関連の研究成果が多いが、特定の研究者に集中する傾向がある。
④関連研究分野及び関連研究者コミュニティの発展への貢献
老化現象の分子メカニズムの解明や脳・神経疾患や難治がんの先端的予防・診断、治療法の開発などを通じて、関連研究者コミュニティの発展に貢献している。
⑤審査(期末)評価結果のフォローアップ状況
医用工学分野において国際水準の非臨床試験に関するAAALAC認証を取得するなど、研究開発から実用化への対応を進めている。
【以下、該当する拠点のみ】
⑥期末評価結果のフォローアップとして、各国立大学の強み・特色としての機能強化への貢献
研究者向けの英語教育の充実、国際共同研究センターの改組など国際化を進めている。
⑦拠点としての今後の方向性
共同利用・共同研究に参加する研究者の利便性を向上するための継続的な運営面での改善や、実用化に向けた医用工学分野の研究の進展が期待される。

## 中間評価結果（公表様式）

### 4 1

大学名	群馬大学
研究施設名	生体調節研究所
拠点の名称	内分泌・代謝学共同研究拠点
認定期間	平成 28 年 4 月 1 日～平成 34 年 3 月 31 日

#### 1. 拠点の目的・概要

##### 【目的・意義・必要性】

内分泌・代謝学分野における国内唯一の基礎医学研究所として、創出基盤技術・リソースを共同利用に供出し、臨床医学研究者を含む当該領域の研究者コミュニティが要望する、メタボリック症候群など社会的要請の高い内分泌・代謝疾患の共同研究課題を遂行し、高水準の研究成果を世界に向けて発信することを目的とする。

##### 【取組内容・期待される効果】

疾患モデル生物、代謝機能解析、エピジェネティクス、ゲノム編集、イメージング技術など、基礎医学研究機関ならではの独自性のある解析技術・研究リソースを共同利用に供し、世界的に注目度の高い当該領域の研究を推進するとともに、次代をリードする研究者育成に貢献し、国際水準の共同研究創出拠点として機能する。

#### 2. 総合評価

##### （評価区分）

A：拠点としての活動は概ね順調に行われており、関連コミュニティへの貢献もあり、今後も、共同利用・共同研究拠点を通じた成果や効果が期待される。

内分泌・代謝学分野の基礎医学研究において、疾患モデル生物等を共同利用に供し、外部機関からの共同研究者の受入れも十分であり、市民向けの啓発活動等も積極的に行っている。

研究テーマが多様化する傾向にあり、今後、内分泌・代謝学分野における拠点の独自性の提示について検討することが望まれる。

### 3. 観点毎の評価

①拠点としての適格性
(評価コメント) 社会的要請の高いメタボリック症候群などの共同利用・共同研究を進めている。
②拠点としての活動状況
(評価コメント) 共同利用・共同研究の公募課題は計画通り実施されており、若手研究者・女性研究者枠や創薬イノベーション枠などを設けている。
③拠点における研究活動の成果
(評価コメント) 市民向けの講演を多数開催するなど、社会発信を積極的に行っている。
④関連研究分野及び関連研究者コミュニティの発展への貢献
(評価コメント) 外部機関からの共同研究者の受入れは十分であり、関連研究者コミュニティの形成に貢献している。
⑤審査(期末)評価結果のフォローアップ状況
(評価コメント) 外国人研究者限定の共同利用・共同研究受入枠の設定や、アジア地域の研究機関を重視した国際連携を行っている。
【以下、該当する拠点のみ】
⑥期末評価結果のフォローアップとして、各国立大学の強み・特色としての機能強化への貢献
(評価コメント) 国際的な研究者の採用、国際連携に着手している。
⑦拠点としての今後の方向性
(評価コメント) 研究テーマが多様化する中で、内分泌・代謝学分野における拠点の独自性の提示について検討することが望まれる。

## 中間評価結果(公表様式)

42

大学名	千葉大学
研究施設名	真菌医学研究センター
拠点の名称	真菌感染症研究拠点
認定期間	平成 28 年 4 月 1 日～平成 34 年 3 月 31 日

### 1. 拠点の目的・概要

#### 【目的・意義・必要性】

超高齢社会などを背景にして全世界で大きな脅威となっている真菌感染症をはじめとする難治性感染症に関して、世界水準の基礎および臨床研究を推進する研究拠点として関連研究者を先導する。また、世界レベルの病原真菌リソース保存機関として、世界の関連コミュニティ研究者による研究活動に大きく貢献する。

#### 【取組内容・期待される効果】

国内唯一の病原真菌研究を専門とする研究機関として、また唯一の真菌症専門外来を実施する施設として、医真菌学・臨床感染症学における研究推進および人材育成に大きく貢献する。また、病原微生物学・感染免疫学など異分野領域との融合研究を積極的に実施し、広く難治性感染症の克服に寄与する。

### 2. 総合評価

#### (評価区分)

A：拠点としての活動は概ね順調に行われており、関連コミュニティへの貢献もあり、今後も、共同利用・共同研究拠点を通じた成果や効果が期待される。

#### (評価コメント)

世界トップレベルの真菌関連バイオリソースを共同利用に供し、センター長の優れたリーダーシップの下で、人材育成や附属病院との連携も重視した拠点活動が行われている。

今後、研究者向けの研究会や啓発活動の継続とともに、国際共同研究等による更なる国際化の推進が期待される。

### 3. 観点毎の評価

①拠点としての適格性
(評価コメント) 世界トップレベルの真菌関連バイオリソース管理施設を共同利用に供し、真菌症専門外来との連携によって、共同利用・共同研究を進めている。
②拠点としての活動状況
(評価コメント) 真菌感染症に関する共同利用・共同研究を行い、優れた臨床成果を上げている。また、附属病院との連携も重視して感染症専門医育成や臨床研究も対象として活動している。一方、外部資金の獲得は、民間等との共同研究や受託研究の増加が見られるものの、十分とは言えない。
③拠点における研究活動の成果
(評価コメント) 全国調査により、新生児深在性真菌感染症の罹患率と予防方法の現状を明らかにした。
④関連研究分野及び関連研究者コミュニティの発展への貢献
(評価コメント) 全国調査の実施や附属病院との連携などにより、関連研究者コミュニティへの寄与は増加している。
⑤審査(期末)評価結果のフォローアップ状況
(評価コメント) 国外連携拠点の充実に努めるとともに、病原真菌・放線菌バイオリソースの充実、共同利用・共同研究拠点事業の英語版公募書式のウェブサイト公開、国際フォーラムの毎年開催、外国人大学院生の受入れ等に取り組んでいるが、国際共同研究は十分とは言えない。
【以下、該当する拠点のみ】
⑥期末評価結果のフォローアップとして、各国立大学の強み・特色としての機能強化への貢献
(評価コメント) 若手研究者の育成とともに、製薬企業との共同研究により産学連携に貢献している。
⑦拠点としての今後の方向性
(評価コメント) 研究者向けの研究会や啓発活動の充実が期待される。

## 中間評価結果（公表様式）

### 4 3

大学名	東京大学
研究施設名	医科学研究所
拠点の名称	基礎・応用医科学の推進と先端医療の実現を目指した医科学共同研究拠点
認定期間	平成 28 年 4 月 1 日～平成 34 年 3 月 31 日

#### 1. 拠点の目的・概要

##### 【目的・意義・必要性】

知的・人的集積拠点の共同利用化のために組織的な展開を図り、がんや感染症等の医科学的諸問題の解決を目的に、本拠点において広範な研究領域の国内外の研究者と公募による共同研究を実施・推進し、医科学研究水準の更なる向上と本共同研究を通じた若手人材育成および国際研究連携を目指す。

##### 【取組内容・期待される効果】

最高水準の研究施設、附属病院、データベース等を広く開放し、広範に渡る専門分野の研究者が受入教員となって共同研究を推進することにより、拠点のハブ的役割を果たすとともに、感染症・免疫、がん、ゲノム医科学等の幅広い基礎生命医科学研究分野の推進と附属病院を活用したトランスレーショナルリサーチ（TR）の発展へ寄与する。

#### 2. 総合評価

##### （評価区分）

S：拠点としての活動が活発に行われており、共同利用・共同研究を通じて特筆すべき成果や効果が見られ、関連コミュニティへの貢献も多大であったと判断される。

##### （評価コメント）

卓越した研究者が多数在籍し、充実した施設・設備を共同利用に供しており、拠点活動が活発に行われている。また、「国際ゲノム医科学研究拠点」、「感染症研究教育拠点連合」及び「国際粘膜ワクチン研究拠点」の機能強化プロジェクト拠点の活動を順調に実施している。

将来の先端医療研究を担える分野横断的な人材育成を更に推進することが期待される。

### 3. 観点毎の評価

①拠点としての適格性
(評価コメント) 多くの卓越した研究者が在籍し、充実した施設・設備を備え、ゲノム情報やタンパク質情報に基づく基礎医学研究を臨床につなげるトランスレーショナルリサーチを推進している。
②拠点としての活動状況
(評価コメント) 多くの公募型の共同利用・共同研究が実施され、国際交流も活発に行われている。
③拠点における研究活動の成果
(評価コメント) インパクトファクターの高い学術誌へ発表された論文が多く、特にがんゲノミクス研究、鳥インフルエンザ研究、腸管粘膜免疫などの研究で画期的な論文や重要な総説が発表されている。
④関連研究分野及び関連研究者コミュニティの発展への貢献
(評価コメント) 関連研究者コミュニティの意見を反映する運営体制が整備されている。機能強化プロジェクト拠点として、関連研究者コミュニティをまとめている。
⑤審査(期末)評価結果のフォローアップ状況
(評価コメント) 共同利用・共同研究の実施件数が着実に増加している。
【以下、該当する拠点のみ】
⑥期末評価結果のフォローアップとして、各国立大学の強み・特色としての機能強化への貢献
(評価コメント) 共同利用・共同研究の公募に当たり積極的な周知を行い、採択機関も医学部のほか、薬学部、獣医学部、理工学部にまで広がっている。
⑦拠点としての今後の方向性
(評価コメント) トランスレーショナルリサーチの推進とオーダーメイド医療の実現というミッションに向けて、更なる研究、人材育成及び社会貢献が期待される。また、研究活動等のより積極的な国際化も期待される。

## 中間評価結果（公表様式）

4 4

大学名	東京医科歯科大学
研究施設名	難治疾患研究所
拠点の名称	難治疾患共同研究拠点
認定期間	平成 28 年 4 月 1 日～平成 34 年 3 月 31 日

### 1. 拠点の目的・概要

#### 【目的・意義・必要性】

難治疾患の病因・病態形成機構解明、診断・予防・治療法開発の基盤形成に資する共同利用・共同研究拠点構築を目的とする。研究所の所有する「疾患バイオリソース」、「疾患モデル動物」、「疾患オミックス」に加え、ヒトゲノム情報を共同研究に有効に活用できるシステムを提供することで研究者コミュニティの要望に応える。

#### 【取組内容・期待される効果】

最先端の解析機器類や科学技術、戦略的に作出する疾患研究リソースなどを共同利用に供することで、難治疾患研究を強力にサポートする。基礎医学・生物学研究から診断・予防・治療法開発までを含めた国内外の共同研究を推進し、難治疾患の診断、予防、治療法の開発などを通じて医療イノベーション創出へ貢献する。

### 2. 総合評価

#### （評価区分）

A：拠点としての活動は概ね順調に行われており、関連コミュニティへの貢献もあり、今後も、共同利用・共同研究拠点を通じた成果や効果が期待される。

#### （評価コメント）

難治疾患に関連する様々な研究資源を共同利用に供し、最先端の設備と充実した支援体制の下で、国際交流等の活動が活発に行われている。

今後、「難治疾患」の定義は、社会からの期待に伴って変動し得ると考えられることから、拠点の方向性を常に確認することが望まれる。

### 3. 観点毎の評価

①拠点としての適格性
(評価コメント) 疾患オミクスデータベースや疾患モデル動物などの様々な研究資源と充実した研究支援体制を有している。
②拠点としての活動状況
(評価コメント) 研究者対象の学会・研究会の開催や、市民向けの啓発活動も活発である。また、非常に高い水準で外部資金を獲得している。
③拠点における研究活動の成果
(評価コメント) 難治疾患に関する先駆的な研究により、国際誌を中心に数多くの論文を発表するなど、論文発表が活発である。
④関連研究分野及び関連研究者コミュニティの発展への貢献
(評価コメント) 各方面の組織からの意見をフィードバックし、設備・資料等の提供だけでなく、国内外のセミナーやシンポジウムなどの多彩な活動を行っており、関連研究者コミュニティに貢献している。
⑤審査(期末)評価結果のフォローアップ状況
(評価コメント) 国内外の研究機関との連携を進展させるなど、適切に対応している。
【以下、該当する拠点のみ】
⑥期末評価結果のフォローアップとして、各国立大学の強み・特色としての機能強化への貢献
(評価コメント) 国際共同研究、大学院生及び留学生が増加している点は評価できる。また、テニュアトラック制度の定着や募集要項の英語化などにも取り組んでいる。
⑦拠点としての今後の方向性
(評価コメント) 「難治疾患」の定義は、社会からの期待に伴って変動し得ると考えられるが、この期待に応じて、拠点の方向性を常に確認することが望まれる。

## 中間評価結果（公表様式）

### 4 5

大学名	新潟大学
研究施設名	脳研究所
拠点の名称	脳神経病理資源活用の疾患病態共同研究拠点
認定期間	平成 28 年 4 月 1 日～平成 34 年 3 月 31 日

#### 1. 拠点の目的・概要

##### 【目的・意義・必要性】

本研究所に蓄積されてきた世界有数規模の脳神経病理標本資源と最先端の脳機能画像解析技術を基に、アルツハイマー病等の脳神経疾患に関する脳病理・病態解析，早期診断技術開発，進行抑制治療に向けた橋渡し等の課題を先進的に研究し，その成果を発信するわが国唯一の共同利用・共同研究拠点として，世界をリードする。

##### 【取組内容・期待される効果】

わが国を代表するヒト脳神経病理標本資源，およびモデル動物資源，さらに臨床応用に向けた橋渡し研究の基盤等を活用して，国内外の研究者と共同研究を展開することにより，難治性脳神経疾患の克服に向けて，疾患の病態解明，早期画像診断法の確立，新規の進行抑制治療法の開発等の効果が期待される。

#### 2. 総合評価

##### （評価区分）

A：拠点としての活動は概ね順調に行われており、関連コミュニティへの貢献もあり、今後も、共同利用・共同研究拠点を通じた成果や効果が期待される。

##### （評価コメント）

質の高いヒト脳神経病理標本や疾患モデル動物等を共同利用に供し、基礎医学と臨床医学が一体となって、研究成果を上げている。

今後、蓄積された豊富な研究資源を活用して、拠点の強みを更に発展させるための具体的な長期戦略の検討を行うことが望まれる。

### 3. 観点毎の評価

①拠点としての適格性
(評価コメント) 質の高い脳病理標本を蓄積するとともに、遺伝子改変マウスを作成し、共同利用に供している。
②拠点としての活動状況
(評価コメント) 脳研究に関連するリソースの提供とともに、脳機能画像解析研究を進めている。基礎から臨床までに幅広い分野で外部資金の獲得に努めている。
③拠点における研究活動の成果
(評価コメント) 基礎医学の研究を臨床医学に還元しており、レベルの高い研究成果を上げている。
④関連研究分野及び関連研究者コミュニティの発展への貢献
(評価コメント) ヒト脳神経病理標本等の研究リソースの提供とともに、研究会を積極的に開催している。
⑤審査(期末)評価結果のフォローアップ状況
(評価コメント) 国際共同研究の公募を開始し、拠点の国際化に努めている。
【以下、該当する拠点のみ】
⑥期末評価結果のフォローアップとして、各国立大学の強み・特色としての機能強化への貢献
(評価コメント) 外部資金の獲得とともに、製薬企業との新薬開発に関わり、大学の機能強化に貢献している。
⑦拠点としての今後の方向性
(評価コメント) 剖検脳組織標本を、海外も含め様々なルートから収集する体制を整えている。基礎と臨床を併せ持つ拠点の強みを更に発展させるため、脳機能画像解析研究等を含めた具体的な長期戦略の検討を行うことが望まれる。

## 中間評価結果（公表様式）

### 4 6

大学名	金沢大学
研究施設名	がん進展制御研究所
拠点の名称	がんの転移・薬剤耐性に関わる先導的共同研究拠点
認定期間	平成 28 年 4 月 1 日～平成 34 年 3 月 31 日

#### 1. 拠点の目的・概要

##### 【目的・意義・必要性】

がんの中でも死亡率の高い「転移と薬剤耐性」に焦点を当てた本邦の中核的研究施設として高い研究水準を保っている。共同利用・共同研究拠点として当該領域の先導的な共同研究を推進することにより、転移と薬剤耐性に代表される「がんの悪性化進展」の分子機構の解明及びそれを克服する新たな治療戦略開発に貢献することを目的とする。

##### 【取組内容・期待される効果】

「がん微小環境」及び「がん幹細胞」研究を中心に据えて、「先進がんモデル共同研究センター」にて先進的新規がんモデルを開発する。それらを用いた研究により先端的かつ独創的な共同研究資源を創出し、革新的基礎研究および治療を目指した応用研究を幅広く展開することにより、がんの悪性化進展研究推進に大きく貢献する。

#### 2. 総合評価

##### （評価区分）

A：拠点としての活動は概ね順調に行われており、関連コミュニティへの貢献もあり、今後も、共同利用・共同研究拠点を通じた成果や効果が期待される。

##### （評価コメント）

がんの「転移と薬剤耐性」に研究ターゲットを絞り、モデル動物を共同利用に供し、世界的に激烈な競争の中で研究成果を上げている。

今後、技術職員による支援体制の充実とともに、国際競争への具体的な対応策の検討を行うことが望まれる。

### 3. 観点毎の評価

①拠点としての適格性
(評価コメント) 臨床的に極めて重要な「転移と薬剤耐性」のモデル動物を開発し、助手及び非常勤の技術職員の支援により共同利用に供しているが、更なる支援体制の充実が望まれる
②拠点としての活動状況
(評価コメント) 国際シンポジウムの開催など国内外の機関との研究交流等を行っている。共同研究者の受入手続の簡素化に取り組むなど、拠点の運営面も工夫している。
③拠点における研究活動の成果
(評価コメント) 創薬に直接的に関わる共同研究を更に広げるプロジェクトを進めている。
④関連研究分野及び関連研究者コミュニティの発展への貢献
(評価コメント) 共同利用・共同研究に関するウェブサイトを分かりやすく作成するとともに、脳腫瘍やがんに関連する研究資源の充実に努めている。
⑤審査(期末)評価結果のフォローアップ状況
(評価コメント) 国立がん研究センターやがん研究会がん研究所との連携を図るとともに、シンポジウム・講演会を積極的に開催している。
【以下、該当する拠点のみ】
⑥期末評価結果のフォローアップとして、各国立大学の強み・特色としての機能強化への貢献
(評価コメント) 大学院生の約半数は外国人であり、国際化に貢献している。
⑦拠点としての今後の方向性
(評価コメント) 研究ターゲットを絞っており、戦略性を持った拠点運営がなされている。社会からの期待が高いテーマ群であり、世界各国の企業・大学との競争の激化に対応するための具体策の検討を行うことが望まれる。

## 中間評価結果(公表様式)

47

大学名	京都大学
研究施設名	ウイルス・再生医科学研究所
拠点の名称	ウイルス感染症・生命科学先端融合的共同研究拠点
認定期間	平成 28 年 4 月 1 日～平成 34 年 3 月 31 日

### 1. 拠点の目的・概要

#### 【目的・意義・必要性】

ウイルス感染症に対処するために生命科学に裏付けられた遺伝子から細胞・個体レベルに至る先端融合的研究を推進することが強く求められている。本研究所で築き上げられてきたウイルス生命科学の技術・知識・設備を基に、多様な共同研究を推進することで我が国のウイルス研究の飛躍的な発展に寄与することを目的とする。

#### 【取組内容・期待される効果】

学内・学外委員によって構成される運営委員会のもと、「①霊長類 P3 感染実験」、「②マウス P3 感染実験」、「③遺伝子・細胞レベルのウイルス・生命科学」の3テーマについて、研究課題を全国公募し研究者コミュニティの要望を踏まえ共同利用・共同研究を実施する。

個体レベルの感染実験が可能なサルおよびマウスの P3 感染実験施設及びウイルス・生命科学に関する研究手法や研究環境、設備、成果の蓄積を共同利用に供することにより、ウイルス感染研究及びその基盤となる生命科学の推進と人材育成に寄与する。

### 2. 総合評価

#### (評価区分)

B：拠点としての活動は行われているものの拠点の規模等と比較して低調であり、作業部会からの助言や関連コミュニティからの意見等を踏まえた適切な取組が必要と判断される。

#### (評価コメント)

卓越した研究者が在籍しており、P3 感染実験施設等を共同利用に供し、優れた研究成果を上げているが、国際共同研究は多いとは言えず、学外利用者がほとんどいない状況である。

今後、研究機関としての優れた取組を維持しながら、共同利用・共同研究拠点としての特色を一層明確にするとともに、拠点の方向性について検討することが望まれる。

### 3. 観点毎の評価

①拠点としての適格性
(評価コメント) 卓越した研究者やリーダーが在籍しており、常勤教員数も多く、総合力を有する。
②拠点としての活動状況
(評価コメント) 外部資金の獲得は良好であるが、共同利用・共同研究の応募が少なく減少傾向にある。
③拠点における研究活動の成果
(評価コメント) 論文数は多く、大半は国際学術誌への発表であり、優れた研究成果を上げている。
④関連研究分野及び関連研究者コミュニティの発展への貢献
(評価コメント) 関連学会や拠点利用者から意見を聴取している。
⑤審査(期末)評価結果のフォローアップ状況
(評価コメント) 生命現象の動態を定量的にとらえる「生命システム研究部門」を設置するとともに、統合領域を俯瞰するために数理解析分野の研究者の採用を進めている。
【以下、該当する拠点のみ】
⑥期末評価結果のフォローアップとして、各国立大学の強み・特色としての機能強化への貢献
(評価コメント) 国際共同研究は多いとは言えない。
⑦拠点としての今後の方向性
(評価コメント) 新分野創成、異分野融合の推進が図られている。
⑧組織再編に伴う拠点活動の状況
(評価コメント) 共同利用・共同研究の対象を「ウイルス研究」とするのか、「生命システム研究」の中に包含していくのか、拠点の方向性について検討することが望まれる。

## 中間評価結果（公表様式）

48

大学名	京都大学
研究施設名	ウイルス・再生医科学研究所
拠点の名称	再生医学・再生医療の先端融合的共同研究拠点
認定期間	平成28年4月1日～平成34年3月31日

### 1. 拠点の目的・概要

#### 【目的・意義・必要性】

再生医学・再生医療分野で先端的な研究実績を挙げてきた本研究所が、集約された知識・技術をもとに多様な先端的共同研究や研究資源の提供を行うことで、再生医学・医療の発展のみならず、基礎から応用にわたる横断的学際研究を開拓、発展させることを目的とする。

#### 【取組内容・期待される効果】

学内外の委員から構成される運営委員会のもと、研究者コミュニティの要望を踏まえて研究課題を全国公募し、共同研究を実施する。また、再生医学に関する情報発信と教育活動を推進する。これらを通じて研究所が培ってきた学術的な成果や技術的な経験を共有することにより、学際的共同研究の促進、再生医学・再生医療の新たな展開及び若手研究者の育成に寄与する。

### 2. 総合評価

#### （評価区分）

B：拠点としての活動は行われているものの拠点の規模等と比較して低調であり、作業部会からの助言や関連コミュニティからの意見等を踏まえた適切な取組が必要と判断される。

#### （評価コメント）

再生医学・再生医療分野において優れた研究業績を上げているが、共同利用・共同研究の応募は十分とは言えない。

今後、研究機関としての優れた取組を維持しながら、共同利用・共同研究拠点としての特色を一層明確にするとともに、拠点の方向性について検討することが望まれる。

### 3. 観点毎の評価

①拠点としての適格性
(評価コメント) 多くの卓越した研究者が在籍し、研究業績、外部資金の獲得は多いが、共同利用・共同研究拠点としての機能に十分に生かされているとは言い難い。
②拠点としての活動状況
(評価コメント) 共同利用・共同研究の応募件数が多いとは言えず、共同利用は減少傾向である。
③拠点における研究活動の成果
(評価コメント) 個々の研究は活発に行われ、外部資金の獲得が多い。
④関連研究分野及び関連研究者コミュニティの発展への貢献
(評価コメント) 学内の他の研究施設、拠点との連携を強化して、関連研究者コミュニティに貢献している。
⑤審査(期末)評価結果のフォローアップ状況
(評価コメント) 生命現象の動態を定量的にとらえる「生命システム研究部門」を設置している。
【以下、該当する拠点のみ】
⑥期末評価結果のフォローアップとして、各国立大学の強み・特色としての機能強化への貢献
(評価コメント) 国内外で共同利用・共同研究を拡大し、国際的に見える研究組織としての発展が望まれる。
⑦拠点としての今後の方向性
(評価コメント) 同一研究施設内の別の共同利用・共同研究拠点との相互作用は確認できない。
⑧組織再編に伴う拠点活動の状況
(評価コメント) ウイルス研究所と再生医科学研究所のガバナンスの統合にとどまらず、学術研究面で融合する方向性を示して共同利用・共同研究拠点としての特色を一層明確にするなど、拠点の方向性について検討することが望まれる。

## 中間評価結果（公表様式）

49

大学名	大阪大学
研究施設名	微生物病研究所
拠点の名称	微生物病共同研究拠点
認定期間	平成28年4月1日～平成34年3月31日

### 1. 拠点の目的・概要

#### 【目的・意義・必要性】

感染症学分野において日本トップレベルの学術的知見、研究施設を有する研究拠点として、集約された知識・技術等を研究者コミュニティや異分野の研究者に提供し、多様な先端的共同研究を推進するとともに、感染症学・生体応答医学・基礎生命科学を積極的、意欲的に担う次世代の若手研究者を教育・育成することを目的とする。

#### 【取組内容・期待される効果】

最先端の大型研究機器、危険度の高い病原微生物を扱う実験施設、遺伝子改変マウスを作製する動物実験施設など特徴ある施設・設備を共同利用に供することにより、分野横断的・学際的共同研究を推進する。これにより、研究者コミュニティの活性化や感染症学における新分野創成が期待され、日本全体の感染症研究の発展に貢献する。

### 2. 総合評価

#### （評価区分）

S：拠点としての活動が活発に行われており、共同利用・共同研究を通じて特筆すべき成果や効果が見られ、関連コミュニティへの貢献も多大であったと判断される。

#### （評価コメント）

卓越した研究者が在籍しており、病原微生物を扱う実験施設等を共同利用に供し、多くの成果論文を発表している。また、研究会や学会の開催も充実し、関連研究者コミュニティに積極的に働きかけており、参加者人数は著しく多い。

今後、外国人研究者の受入人数を更に増加させることが期待される。

### 3. 観点毎の評価

①拠点としての適格性
(評価コメント) 微生物学研究のみならず、免疫、老化研究でも卓越した研究者が在籍し、国際化も意識して、極めてレベルが高い共同利用・共同研究を推進している。
②拠点としての活動状況
(評価コメント) 国内にとどまらず、海外の研究機関の研究者への支援を開始している。
③拠点における研究活動の成果
(評価コメント) 論文の質・量ともに問題なく、企業との共同研究の成果の実用化にも積極的である。
④関連研究分野及び関連研究者コミュニティの発展への貢献
(評価コメント) 拠点活動を国際的に広く開放する姿勢や、微生物を中心とした大きな研究領域での関連研究者コミュニティに積極的に働きかける姿勢は、高く評価できる。
⑤審査(期末)評価結果のフォローアップ状況
(評価コメント) 独自財源で海外奨学金制度を創設し留学生を受け入れている。また、多くの外国人研究者を採用し、常勤の外国人研究者の割合は一割を超えている。
【以下、該当する拠点のみ】
⑥期末評価結果のフォローアップとして、各国立大学の強み・特色としての機能強化への貢献
(評価コメント) 多くの大学院生や留学生が共同利用・共同研究に参加している。
⑦拠点としての今後の方向性
(評価コメント) 国際化・国際貢献に努め、国内の他機関と協調すると同時に公正な競争に目配りをしており、今後も進展が期待される。

## 中間評価結果（公表様式）

50

大学名	徳島大学
研究施設名	先端酵素学研究所
拠点の名称	酵素学研究拠点
認定期間	平成28年4月1日～平成34年3月31日

### 1. 拠点の目的・概要

#### 【目的・意義・必要性】

我が国唯一の酵素学分野の研究拠点として、基礎医学研究者コミュニティと広範な医学応用を望む研究者コミュニティとが、酵素学を共通のキーワードとして、健康・疾患生命科学と医学応用の領域で共同利用・共同研究を推進し、先端酵素学を先導することで、社会的要請に応え、新たな学術研究の展開を図ることを目的とする。

#### 【取組内容・期待される効果】

世界屈指の解析装置を用いたプロテオミクス解析、メタボロミクス解析並びにゲノミクス解析、個体解析を共同利用に供することにより、ゲノムから個体までの情報を統合した網羅的酵素・タンパク質の機能解析を推進する。さらに、病態解明と創薬イノベーション創出に向けた応用研究を推進するとともに、最先端酵素学の知識と技術の提供を通じて研究者の基礎的研究能力を充実させ、新たな学術研究領域の創成とその発展に貢献する。

### 2. 総合評価

#### （評価区分）

B：拠点としての活動は行われているものの拠点の規模等と比較して低調であり、作業部会からの助言や関連コミュニティからの意見等を踏まえた適切な取組が必要と判断される。

#### （評価コメント）

酵素・タンパク質の機能解析関連の施設・設備を共同利用に供し、免疫、糖尿病、代謝において優れた研究成果を上げているが、共同利用・共同研究の件数は多いとは言えない。

今後、共同利用・共同研究の中核となる考え方や研究手法を踏まえ、拠点の魅力を高めていくことが望まれる。

### 3. 観点毎の評価

①拠点としての適格性
(評価コメント) 酵素・タンパク質の機能解析関連の施設・設備を備え、共同利用に供しているが、外部に対する利便性は十分とは言えない。
②拠点としての活動状況
(評価コメント) 共同利用・共同研究の活動は活発になっているが、共同利用は多いとは言えない。
③拠点における研究活動の成果
(評価コメント) インパクトファクターの高い学術誌への論文発表がなされている。
④関連研究分野及び関連研究者コミュニティの発展への貢献
(評価コメント) 世界トップクラスの研究者による外部評価や助言を踏まえた拠点運営により、関連研究者コミュニティの発展に貢献している。
⑤審査(期末)評価結果のフォローアップ状況
(評価コメント) 大学院生、若手研究者を積極的に受け入れており、拠点活動への参画は増加している。
【以下、該当する拠点のみ】
⑥期末評価結果のフォローアップとして、各国立大学の強み・特色としての機能強化への貢献
(評価コメント) 国際化などの努力による大学の機能強化への貢献が見られる。
⑦拠点としての今後の方向性
(評価コメント) 国内外の研究者との交流をさらに深め、拠点としての強み・特色を明確にすることが期待される。
⑧組織再編に伴う拠点活動の状況
(評価コメント) 今後、研究機関としての体制整備とともに、酵素・代謝学領域の拠点としての魅力を高めていくことが望まれる。

## 中間評価結果（公表様式）

5 1

大学名	九州大学
研究施設名	生体防御医学研究所
拠点の名称	多階層生体防御システム研究拠点
認定期間	平成 28 年 4 月 1 日～平成 34 年 3 月 31 日

### 1. 拠点の目的・概要

#### 【目的・意義・必要性】

生体防御医学分野における先端的かつ学際的な共同研究拠点として、各種オミクス（網羅的生体分子情報学）・構造生物学・発生工学などの新規技術開発を先導し、多階層の基盤科学技術を格段に発展させ、以って我が国の生体防御領域の学術研究を世界最高水準レベルに引き上げることを目的とする。

#### 【取組内容・期待される効果】

多階層（各種オミクス・構造生物学・発生生物学）の新規技術開発の共同利用・共同研究を推進して、生体防御に関連する多階層情報を体系化して提供するとともに、生体防御システムの破綻による疾患メカニズムの解明に関する先端学際的共同研究を推進する。これにより、難病克服・健康増進に貢献する。

### 2. 総合評価

#### （評価区分）

A：拠点としての活動は概ね順調に行われており、関連コミュニティへの貢献もあり、今後も、共同利用・共同研究拠点を通じた成果や効果が期待される。

#### （評価コメント）

オミクス研究やエピゲノミクス研究に関連する充実した施設・設備を共同利用に供し、整った支援体制の下で、活発に共同利用・共同研究を行っている。  
今後、世界的な拠点へと発展していくために、国際化を着実に進めていくことが期待される。

### 3. 観点毎の評価

①拠点としての適格性
(評価コメント) 施設・設備及び人員が整備され、支援体制が整っている。
②拠点としての活動状況
(評価コメント) 研究施設の利用、委託解析等の共同利用・共同研究が着実に実施されている。
③拠点における研究活動の成果
(評価コメント) 遺伝子発現制御、免疫学、がん研究等の分野で、世界をリードする研究成果を上げている。
④関連研究分野及び関連研究者コミュニティの発展への貢献
(評価コメント) 関連研究者コミュニティの意見を受け入れる運営体制がとられている。また、共同利用・共同研究に採択された研究者以外にも共通機器を公開し、DNAシーケンス解析、電子顕微鏡観察、遺伝子改変マウス作成、プロテオーム解析、マイクロアレイ解析等の支援サービスを提供している。
⑤審査（期末）評価結果のフォローアップ状況
(評価コメント) 共同利用・共同研究の国際公募を行い、国際化を進めている。また、「トランスオミクス医学研究センター」と「システム免疫学統合研究センター」を設置し、多階層の生体情報を基盤とした共同利用・共同研究の推進体制を整えた。
【以下、該当する拠点のみ】
⑥期末評価結果のフォローアップとして、各国立大学の強み・特色としての機能強化への貢献
(評価コメント) 国際シンポジウム、国際共同研究等を通じて国際化を図っている。また、若手研究者、女性研究者及び外国人研究者の育成と大学院教育を積極的に行っている。
⑦拠点としての今後の方向性
(評価コメント) 今後、世界的な拠点へと発展していくために、国際化を着実に進めていくことが期待される。

## 中間評価結果（公表様式）

### 5 2

大学名	長崎大学
研究施設名	熱帯医学研究所
拠点の名称	熱帯医学研究拠点
認定期間	平成 28 年 4 月 1 日～平成 34 年 3 月 31 日

#### 1. 拠点の目的・概要

##### 【目的・意義・必要性】

これまでの国際的な活動実績とアジア・アフリカ海外教育研究施設などの研究基盤を背景とし、熱帯感染症の流行する現場に根ざした国内外の関連機関との共同研究を先導すると共に、感染症研究動向情報や病原体のリソースセンターとして機能し学術コミュニティの活性化に貢献することを目的とする。

##### 【取組内容・期待される効果】

国内と海外拠点に整備した BSL-3 までの病原体を扱うことのできる設備及びコホート基盤を共同利用に供することにより、熱帯病・新興感染症の対策研究を推進する。これにより、オールジャパン体制での熱帯医学研究を活性化し、研究成果の応用による育薬、熱帯病の防圧ならびに健康増進への国際貢献、これらに係る研究者と専門家の育成に寄与する。

#### 2. 総合評価

##### （評価区分）

A：拠点としての活動は概ね順調に行われており、関連コミュニティへの貢献もあり、今後も、共同利用・共同研究拠点を通じた成果や効果が期待される。

##### （評価コメント）

国際感染症に関連する設備と海外拠点等を共同利用に供し、熱帯病・新興感染症に関する共同利用・共同研究が活発に行われている。また、広報活動や若手研究者育成にも積極的に取り組んでいる。

今後、フィールドワークの範囲や対象疾患を戦略的に絞り、拠点の特色を明確化することが期待される。

### 3. 観点毎の評価

①拠点としての適格性
(評価コメント) 国際感染症に関する設備や海外拠点を共同利用に供し、共同利用・共同研究を活発に展開している。
②拠点としての活動状況
(評価コメント) 拠点の活動は活発であるが、公募型の共同利用・共同研究は少ない。
③拠点における研究活動の成果
(評価コメント) 海外も含めた共同利用・共同研究の推進状況は良好であるが、研究者一人当たりの論文数は多いとは言い難い。
④関連研究分野及び関連研究者コミュニティの発展への貢献
(評価コメント) 国際共同研究が多く、外部研究者の受入れにも積極的であり、関連研究者コミュニティに貢献している。
⑤審査(期末)評価結果のフォローアップ状況
(評価コメント) 国際共同研究への新規参入の促進、国際誌への投稿を支援するシステムの整備などに取り組んでいる。
【以下、該当する拠点のみ】
⑥期末評価結果のフォローアップとして、各国立大学の強み・特色としての機能強化への貢献
(評価コメント) 熱帯医学・グローバルヘルス研究科を立ち上げるなど、大学の機能強化に貢献している。
⑦拠点としての今後の方向性
(評価コメント) フィールドワークの範囲や対象疾患を戦略的に絞り、拠点の特色を明確化することが期待される。

## 中間評価結果（公表様式）

53

大学名	熊本大学
研究施設名	発生医学研究所
拠点の名称	発生医学の共同研究拠点
認定期間	平成28年4月1日～平成34年3月31日

### 1. 拠点の目的・概要

#### 【目的・意義・必要性】

発生学の観点から生命現象とヒト疾患の解明を推進する発生医学分野において、国内外の共同利用・共同研究を先導し、発生医学の国際的な研究基盤を構築することを目的とする。発生過程の身体づくりという原点から、生涯にわたる健康生命に関する基礎研究を実施する意義と必要性がある。

#### 【取組内容・期待される効果】

発生医学分野の先端研究、恒常的視野に立った人材育成、リエゾンラボ研究推進施設による支援、国内外の連携ネットワークを通して、国際レベルの共同研究を活性化する。発生過程の仕組みを分子、細胞、器官、個体において究明し、ヒト疾患の病因解明、診断・予防法の確立を目指すとともに、再生医療等の安全で有効な治療法の開発に貢献する。

### 2. 総合評価

#### （評価区分）

A：拠点としての活動は概ね順調に行われており、関連コミュニティへの貢献もあり、今後も、共同利用・共同研究拠点を通じた成果や効果が期待される。

#### （評価コメント）

卓越した研究者が在籍しており、発生医学関連のリエゾンラボ等を共同利用に供し、着実に質の高い研究業績を上げている。

今後、拠点の求心力を高めるため、国際共同研究を含めた共同利用・共同研究の件数を増やしていくことが期待される。

### 3. 観点毎の評価

①拠点としての適格性
(評価コメント) 卓越した研究リーダーが複数在籍しており、拠点の支援体制も充実している。
②拠点としての活動状況
(評価コメント) 様々な方法で共同利用・共同研究の情報発信に努めており、外国人研究者の共同利用・共同研究への参画が促されることが望まれる。
③拠点における研究活動の成果
(評価コメント) インパクトファクターの高い学術誌での論文発表が活発である。また先端的研究と関連付けた国際的活動は評価できる。
④関連研究分野及び関連研究者コミュニティの発展への貢献
(評価コメント) 発生制御の分子レベル研究、幹細胞分化から器官臓器構築に至る先端的研究を展開する中で、発生医学・再生医学分野の関連研究者コミュニティの発展に貢献している。
⑤審査(期末)評価結果のフォローアップ状況
(評価コメント) 国際交流について、国際シンポジウムや招へいセミナーの開催、国際公募による海外研究者の来所など着実に進められているが、外国人研究者の共同利用・共同研究への参画を更に増加させることが望まれる。
【以下、該当する拠点のみ】
⑥期末評価結果のフォローアップとして、各国立大学の強み・特色としての機能強化への貢献
(評価コメント) グローバルサイエンス推進施設の新設など、発生医学の研究推進の観点から大学の機能強化に貢献している。
⑦拠点としての今後の方向性
(評価コメント) 従来どおり、質の高い発生医学を基盤とした研究を維持・推進することが期待される。

## 中間評価結果（公表様式）

### 5 4

拠点の名称	放射線災害・医科学研究拠点(ネットワーク型)
研究施設名 (大学名)	原爆放射線医科学研究所(広島大学)【中核機関】 原爆後障害医療研究所(長崎大学) ふくしま国際医療科学センター(福島県立医科大学)
認定期間	平成 28 年 4 月 1 日～平成 34 年 3 月 31 日

#### 1. 拠点の目的・概要

##### 【目的・意義・必要性】

放射線の生物影響に関する基礎研究や緊急被ばく医療とその前臨床研究、フィールドワーク等の研究活動をネットワーク型拠点3機関が一体となって強力に推進し、放射線災害・医科学研究の学術基盤の確立と、国民への成果還元や国際社会への発信を行う。同時に、福島復興に資する学術拠点としての役割を果たす。

##### 【取組内容・期待される効果】

3機関の有する最先端分析機器や実験サービス、福島県内のフィールド拠点等の提供により、放射線リスク制御研究を推進するとともに、生体分子イメージング研究開発など放射線の光の側面の研究にも注力する。福島県民の健康管理や緊急被ばく医療に資するとともに、放射線防護基準や産業放射線利用指針の策定に寄与する。

#### 2. 総合評価

##### (評価区分)

A：拠点としての活動は概ね順調に行われており、関連コミュニティへの貢献もあり、今後も、共同利用・共同研究拠点を通じた成果や効果が期待される。

##### (評価コメント)

放射線災害・医科学研究関連の分析機器やフィールドを共同利用に供し、多くの共同利用・共同研究がなされている。

今後、各大学の役割分担や拠点間の連携による相乗効果等を明確化し、その成果を社会に分かりやすく発信することが望まれる。

### 3. 観点毎の評価

①拠点としての適格性
(評価コメント) 三大学が有する設備・フィールドを共同利用に供し、高い社会的ニーズにかなった共同利用・共同研究を行っている。
②拠点としての活動状況
(評価コメント) 多数の共同利用・共同研究が行われ、その成果を論文等で発表している。
③拠点における研究活動の成果
(評価コメント) 放射線医学の分野は広範で、DNA 損傷研究や白血病発症の機構解析も包含されるが、限られた資源の中では、疫学や低線量放射線の影響などに特化することについての検討を行うことも望まれる。
④関連研究分野及び関連研究者コミュニティの発展への貢献
(評価コメント) 放射線影響に関する多くの共同利用・共同研究を行い、優れた成果を上げることで、関連研究分野及び関連研究者コミュニティの発展に貢献している。
⑤審査(期末)評価結果のフォローアップ状況
(評価コメント) ネットワーク拠点間の有機的連携による新たな成果創出については十分とは言えない。
【以下、該当する拠点のみ】
⑥期末評価結果のフォローアップとして、各国立大学の強み・特色としての機能強化への貢献
(評価コメント) 放射線災害は、時間の経過とともに対応すべき課題が変化するため、拠点活動として継続するものと、そうでないものを区別していくことが望まれる。
⑦拠点としての今後の方向性
(評価コメント) ネットワークを構成する各大学の拠点間の相乗効果や補完効果をより一層高め、その成果を社会に分かりやすく発信することが望まれる。
⑧組織再編に伴う拠点活動の状況
(評価コメント) ネットワーク型拠点としてのスケールメリットを生かしているが、各大学の役割分担や拠点間の連携による相乗効果等を明確化することが望まれる。